

## ◇金印「漢委奴国王」

①倭奴国は、金印「漢委奴国王」で広く知られている。『後漢書』に、こうもある。  
 「本紀」、「二年春正月辛未、初めて北郊を立て、后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す」

「倭伝」、「建武中元二年、倭奴国、貢を奉じて朝貢す。倭国の極南界にあり。光武、賜うに印綬を以つてす」

☆倭奴国Ⅱ委奴国と思われがちだが、そうとは言い切れない。  
 ②金印「漢委奴国王」の解釈については、諸説がある。

★三宅米吉氏（一八六〇〜一九二六年）は、「漢委奴国王印考」でこう主張した。

一、漢の委の奴の国王と読むべし。委は倭なり、奴国は古の儼県、今の那珂郡なり、後漢書にある倭奴国も倭の奴国なり。

一、奴国は、「倭人伝」に「（末盧国から）東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。東南して奴国に至るまで百里。・・二万余戸あり」とある奴国のことで、古の九州北部の大国と見ゆ。

★文化庁編の『国宝事典』では、「金印の訓みについてはなお定説をみない」としている。

★京大日本史辞典編纂会編『新編日本史辞典』では、金印について、

「問題点が多く存在していて、委奴国の訓み方も、伊都国説など諸説がある」とする。

③戦後の学校教育では三宅米吉の説に沿った形で、金印「漢委奴国王」の訓み方を「漢の倭の奴の国王」と教えるが、それでよ



金印〈漢委奴国王〉

いのか。というのも、この結論が音韻に重きを置くなど狭い視野の中で導かれているからだ。しかも奴国が「倭人伝」の奴国に該当して畿県にあつたとするが、これも怪しい。なぜなら、「倭人伝」の記事どおりに地図上をたどると、末盧国（松浦市・唐津市）から東南五百里の伊都国は吉野ケ里辺り、伊都国から東南百里の奴国は福岡県山戸郡近辺となるからだ。

「倭人伝」、「末盧国から」東南に陸行すること五百里、伊都国に至る」、「（伊都国から）東南して奴国に至るまで百里」、

「次に奴国ありて、女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国ありて、男子を王と為す」、  
「其の八年（二四七年）、太守王頌、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず」

「伊邪那伎記」、「筑紫島は、身一つにして面四つあり。面毎に名あり。故、筑紫国、豊国、肥国、熊會（熊襲）国」

☆狗奴国は女王国に属さない。その地は熊會に該当する。

☆卑弥呼呼は天孫火瓊瓊杵のこと。妻の家に婿入りした彼が吾田の笠沙宮から日向に遷都した故、そこも西都、妻、笠沙宮と呼ばれた。つまり、投馬<sup>つま</sup>妻の国<sup>ニ</sup>西都市妻なのである。

★以上からわかるように、「倭人伝」の奴国が金印の委奴国や畿県と見るのは、語呂合わせに過ぎない。

④三宅氏の「漢委奴国王印考」には、倭が如何なる国だったのか的  
確な考察がない。さらに言うと、奴国の国情、魏に朝貢するに至  
った経緯、奴国と倭・百余国・畿内勢との関係、それに邪馬台国



誕生に至った経緯について、歴史的観点から眺めた考察が何らない。

⑤ 「地理志」、「楽浪海中に東夷あり、分たれて百余国となり、歳時を以て来たり、献じ見ゆ」にある東夷が、『後漢書』「倭伝」の「建武中元二年、東夷の倭奴国、貢を奉じて朝貢す。」とある東夷の倭奴国や、金印の委奴国とどう関係するか、これも看過できない。

★本書では、「地理志」の記事は紀元前一世紀の伊都国王朝期にあたり、『後漢書』「倭伝」の方は、一世紀の倭奴国王朝期に相当すると見ている。

⑥ 通説では、「その当時、都市規模の小国が百余国も乱立していて、統一国家などなかった」と決め付けているが、この考えは浅い。倭の国域について、多面的にもっと検討すべきだ。

★前五〜三世紀に、北九州に都する王朝が北陸や東海地方まで支配したのは、水田稲作と遠賀川式土器の拡散、青銅祭器の分布、伊奘諾の国生み神話から見て、疑いようがない。

★戦国期の呉も越も中国の覇者を目指して北上し、あと一步のところまで迫った。その児や孫の世代が日本列島に渡って来たのだから、渡来時から日本列島の覇権を目指して当然だ。

★そもそも、金印拝受の意味するところは、遠隔地域を治める盟主が漢朝に朝貢してきた点にある。倭の一小国である奴国の王が礼を重ねて参内したところで、銅印授与が分相応だ。

⑦ 倭の漢字は記紀に頻繁に登場するが、その訓みはヤマトである。一世紀前半、この倭国と豊葦原中つ国が連合して伊都国王朝を倒し、倭奴国王朝と称して福岡平野に都した。その後の伊都国王は臣下に落ちぶれたが、外交経験が豊富だったことで漢との交渉ごとを任せられたらしい。

五七年、倭奴国王はかつての伊都国王を太夫に立てて漢の都に送り出した結果、

漢は、「倭奴国、貢を奉じて朝貢す。・光武、賜うに印綬を以つてす」と書き残す一方、この使者の生まれ育った伊都国が年毎に朝貢してきたことに配慮し、「委奴国王」とも「倭奴国王」とも読める鱗形紐の金印を与えたのであろう。